

日本学術会議哲学委員会主催・公開シンポジウム

2022.12.10

(日本哲学系諸学会連合・日本宗教研究諸学会連合共催)

今、なぜ「国家」が問われるのか

芦名定道・重田園江・八木久美子
石井剛・齋藤純一・隠岐さや香

プログラム

①趣旨説明

芦名定道発表 13:30 —

②重田園江発表 14:00 —

③八木久美子発表 14:20 —

④石井剛発表 14:40 —

司会 = 奥田太郎

⑤コメント：齋藤純一 15:15 —

：隠岐さや香 15:30 —

⑥ディスカッション 15:45 —

本シンポジウムの趣旨

新型コロナウイルス（COVID-19）パンデミック、そしてロシアのウクライナ侵攻の中で、「国家」（国民国家）の問い直しが求められている。国民国家とその集合体（ウェストファリア体制）を中心とした世界秩序は、この数百年の間に、欧米を中心に全世界に浸透し、近現代世界を規定するものとして存在している。しかし、1980年頃からのグローバル化の顕著な進展などによって、これまでこの世界秩序の限界がさまざま指摘されてきた。地球温暖化問題などが国民国家の利害関係を超えた緊急課題として意識されているのは、その一例である。こうした状況下で、現在、人類社会を脅かしているパンデミックとウクライナの問題は、グローバル化とは逆の方向に世界の分断（多極化）を促進し、その分断は国民国家内部にも及んでいる。これは、国民国家とグローバル化とが内包していた問題点を今問われるべき課題として顕在化させたと言えよう。もちろん、個々の問題点について意見はさまざまであるが、いずれにしても、国民国家の問い直しは、国民一人ひとりの生活に関わるものであるという点で、まさに国民的課題なのである。本シンポジウムでは、現代の学術の知を結集してこの大問題に対して取り組み、国民に向けた発信を試みたい。